源から大海へと注ぐ流れ

日本盲教育史研究会事務局長　岸　博実

■全障研に導いてくれた人

1974年に私が京都府立盲学校で働き始めてから43年目です。新採の私を全障研へと導いてくださったのは、永井昌彦さんや竹内勝美さんでした。

永井さんは点字使用者として初めて大学に合格し、英語の先生をなさっていました。高等部にも重複学級を設け、どんなに障害の重い子にも教育権を保障しようと力を尽くしていらっしゃいました。

竹内さんは弱視で社会の担当。視覚障害者の高等教育保障などのとりくみの先頭に立って、戦時中の「海軍でマッサージ師として働いた」経験を伝えながら、平和の大切さを教えてくださいました。

お二人とも、京都の全障研が立ち上がるときに大きな働きをされました。1979年に開催された全障研第13回京都大会にいっしょに参加した感激が思い出されます。

■京都盲唖院の創立

京都府立盲学校の源流にあたる京都盲唖院が創立されたのは1878（明治11）年でした。わが国の近代的な障害児教育の始まりを告げるできごとでした。以来、1974年の養護学校義務化までの100年近く、盲・ろう教育は、「すべての障害児者の発達権保障を求める流れ」を準備してきました。

明治20年代に、東京盲学校長・小西信八が「教育権」を主張しましたし、1906（明治39）年には東京・大阪・京都の校長・院長が文部大臣に対して「盲・ろう教育の義務化」を上申しました。大正の初めには、京都盲唖院長であった鳥居嘉三郎が「共同作業場」を開設しています。

■障害児教育の歴史探訪

「プラスワン　あなたと次の一歩を」と呼びかけられている第50回京都大会を機に、障害児教育の歴史を訪ねてみるのもすばらしいプラスワンなのではないでしょうか。以下はそのためのささやかなガイドです。

＊

大会会場の国際会議場から地下鉄烏丸線で丸太町駅まで行ってみましょう。その西北に京都府庁があります。その南に位置する京都第二赤十字病院の敷地（南端）に「日本最初盲唖院創建之地石碑」があります。明治12年から昭和12年までの校舎がここにありました。

京都府庁から北東へ移動すると、京都御苑の北、同志社大学に到着します。その創立者・新島襄と妻の八重、八重の兄で盲目の山本覚馬たちは、京都盲唖院を支えるため募金などに協力してくれました。

京都御苑の南、東洞院通を御池通の手前まで下がった東側のマンション敷地内に「日本最初盲唖院開学之地」石碑があります。1878年に京都盲唖院を創立した場所です。

このほかにも、古河太四郎が盲・ろう児の指導に着手した待賢小学校の跡地近くには「日本盲唖教育発祥之地石碑」が大切に守られています。現在、丸太町通の南にある待賢小学校跡ではなく、少し北へ行った猪熊通りの瓦屋さんの敷地にありますので、ご注意ください。

（きし　ひろみ）

▶京都盲唖院創立の場所に立つ碑